



Episode 21 (最終回)

## 生命と文明

本コーナーのタイトル「Be Ambitious!」はウイリアム・エス・クラーク博士の名言“Boys, be ambitious like this old man”から拝借しました。「未来を自ら切り拓くべし」という後進への強い期待の意も込めて、長年に渡り、血液学の世界で活躍して来られた名誉会員の先生方から現役の先生方に向けた熱く且つ含蓄豊かなメッセージをお届けいたします。



日本医科大学名誉教授  
了徳寺大学学長  
檀 和夫

## はじめに



この「Be Ambitious!」というシリーズは若い血液内科医へ、そして次代のリーダー達への「メッセージ」というのがその目的とのことですが、一般に「メッセージ」の送り方というものは一様ではなく、親が子供に「自分の背中を、生き様を黙って示し、そこから何かを感じてもらい、学んでもらう」というやり方もあり（今までのこの「Be Ambitious!」の多くの諸先輩方の原稿はこれに該当するでしょう）、一方ではより能動的に主張を伝えるというやり方もあります。そこで、このシリーズの最終回にあたり、後者の方法で今までとは全く毛色の違った「Be Ambitious!」を書いてみたいと思います。強い主張にはそれなりの反発も付き物ですが、それも反応の強さであり敢えて能動的な「メッセージ」としてみたいと思います。といっても私ごとが言えることはあまりありませんが、先輩の一医学徒から若き医学者への言葉を、という趣旨に意を強くして「豚もおだてりや木に登る」の心境で書いてみたいと思います。少しでも「メッセージ」が伝われば本望です。

## Professional であれ、 しかし専門バカになるな



この「Be Ambitious!」の読者である若き血液内科医達は毎日、研究と臨床と教育（学生および若手医師）に明け暮れ、すでにこれらの領域では professional あるいはそれに近い域に達しているでしょうし、改めて助言を必要とするとも思えず、私ごときもその任ではありません。したがって、professional が備えるべき絶対の自信・自負や自分の仕事・組織に対する完璧な責任などについては改めて触れるべくもありません。

Boys, be ambitious! Be ambitious not for money or for selfish aggrandizement, not for that evanescent thing which men call fame. Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be. (稲富栄次郎：明治初期教育思想の研究；朝日新聞「天声人語」1964.3.16)。これは本当にクラーク博士の言葉かどうかは不明とも言われますが、その真偽のほどはともかく、この最後の「人間としてこうあるべきというあらゆることを身につけるといふ大志を持って」といふ言葉は極めて重要と思えます。

医師・医学者が持つ第一の価値観は当然のことながら生命と健康を大切にすることであり、そのことに異論を挟む人はいないで

しょう。であるならば、生命・健康に第一の価値観を置く者として、生命を軽んじる状況（テロや戦争だけでなく、弱者の存在を意識の外に追いやりやすく見逃しやすい社会状況を含めて）にも重大な関心を抱き、常に注視し思いを致すべきです。生命と健康を扱う医学に一所懸命携わっているのだから、それ以外の事象にまでは関与することはないだろう、と言うのは逃げというものです。現在の日本、世界、そして地球の生命を取り巻く状況・環境を鑑みれば、医学・医療に注ぐと同じ重要性を感じるのは自然のことであり、さらに言うところの一番の価値観を置く大切な生命は何も人間だけに限ったことではなく、この地球上の全ての生き物にも当てはまることです。人間は二足歩行を獲得後大脳が発達し高度な知的活動を可能とする生命体へと進化しましたが、反面では人間以外の生物、生命に対する思慮の欠如がかけがえのない地球を人間のエゴのままに破壊し尽くさんばかりです。人間は、地球という巨大な生命体に住む一生物種に過ぎません。

地球上の全ての生物はその自然界の中でお互いに共存しあってこそ生きています。動物界では弱肉強食の原理の下互いに殺しあいますが、どの動物も生存する上で必要不可欠な分だけであり、それによって自然界のバランスも成り立っているのです。しかし、強欲な人間は別です。生きるためだけでなく富として蓄えるためにどこまでも奪い尽くし、その挙句、自然界は破壊されその害は巡り巡って人間に降りかかってくるまで気がつきません。地球は動物も植物も含めて全ての生命の生物連鎖、食物連鎖で成り立っていることは私がここで声を大にして強調すべきほどのことではない自明の理ですが、今地球上で起きていることを見れば地球のエコシステムが機能不全に陥りつつあることは明らかであり、多くの人々はそれを漠然と感じていながら、敢えて日常生活に埋没することによって意識の上に載せないようにしています。

物質文明全盛、経済至上主義に汚染された現代の人間社会はどのような状況になっているのでしょうか。地球上の至る場所で強国のエゴ、パワーポリティクス犠牲となっている数千万の命については当然誰もが心を痛めています。しかしあからさまな殺戮でないために見落とされがちですが、他にも貧富の格差（格差などという言葉では言い表せない考えられない差）、人種差別、宗教、特に一神教にみられやすい排他性などのためにもたらされる政治、経済を含めた社会状況により、健康という言葉からは程遠い生活を強いられ、社会的、経済的に抹殺されつつある人々の問題があることを忘れてはなりません。非正規雇用者、派遣労働者、パートタイマー、アルバイト等々の名前と呼ばれ、使い捨てにされ人知れず社会から排除されている下層階級が驚くべき速さで増加し続けています。現在の世界を支配している強権主義（パワーポリティクスで成立する国家間の関係と先進国の強権指向、

大企業のみならず、ブラック企業と呼ばれる会社の雇用策等）は経済至上主義がもたらす当然の結果です。経済至上主義は勝者を作り上げ、その勝者は敗者すなわちこれら下層階級の人達の利益を最小限に抑えることによってしか成り立たない構造です。しかし医師という一般通念上「裕福」と考えられている階層にいると、社会的排除の対象となっている人々のことに思いを致すことは殆どなく、むしろ我々はその存在に対して無意識あるいは意識的に考えないようにしています。辺見庸の厳しい言葉を借りればそれを許している「加担者」であり、飢える者への想像を放棄することは未必の故意の殺人であるとまで言われてしまいます（辺見庸「自分自身への審問」）。そこには差別される側に立った時の気持ちや、彼らを取り巻く生活環境へ思いを致すことのできる想像力の欠如あるいは考えないという逃げがあります。戦争に限らず、経済至上主義が結果的にもたらさざるを得ない多くの敗者達の生命、健康を危うくさせる状況が常態化していることを忘れてはなりません。

昭和40年代後半から推し進められた高度成長期の中で確立してきた日本の経済至上主義は、消費・浪費を反復し続け、それによってもたらされた生産性第一というスローガンのもと物質・金を手にすることに多くの日本人は最上の価値を見出すこととなりました。ここが日本人の価値観の最大の転換点であり、それに伴う精神性の喪失の結果、利己的・自己中心的で他人・地域社会・国に無関心かつ閉鎖的な日本人となっていきました。生身の人間関係が希薄になっている現代社会に圧倒的に欠けている人と人との対話、心の交流、顔の表情、温もり、冷淡さ、感触や痛みなど、交感可能だったものが今、交感不能になりつつあるように思われます（辺見庸「しのびよる破局」）。そしてこのような精神性の喪失が前述の、差別される側に立った時の気持ち・状況を考えられない想像力の欠如に繋がっているのは明らかでしょう。

経済至上主義で突っ走り1968年にはGDP世界第2位にまで昇り詰めたことと引き換えに膨大な自然破壊、環境破壊、公害そして何よりも価値観の転換による日本人の精神性の荒廃をもたらしました。これらの大事なことを失ってまでも経済至上主義を相変わらず第一義として良いのでしょうか。例えば3.11福島原発事故の後、世間で盛んに言われた「復興」とは3.11以前の社会に戻れば良いということでは全くありません。従来と全く同じ経済的繁栄を目指し精神性を喪失した不安定な日本を再びその将来像とするのか、あるいは地に足をつけた国のあり方をここで見直すのか、日本はその正念場に立たされていることに思いを馳せるべきです。しかし現実には立ち止まって思慮することなくずるずると今までの道に戻り始めています。

何故日本人は社会の大勢に押され、物事を深く考えずにぬるま湯に浸かった状況を是とし、流されてしまうのでしょうか。山本

七平が言うように日本人の「総意」としての意思決定の方法は常に「空気」に左右され、体制が醸成する「空気」には誰もが抗えず、おとなしく受け入れます（山本七平「空気の研究」）。そして、その時その時の「空気」に支配され、右へ左へと振られてしまう日本人の特質があり、1962年の日中国交樹立の時に周恩来が田中角栄に贈った言葉の中でも日本人の特質を見抜かされ揶揄されてしまいます。この「空気」という訳の分からないものに支配される日本人が破滅にまで突っ走ったのが太平洋戦争であり、しかもあれだけの悲惨な体験をしたにもかかわらず戦後になってこの「空気」というあやふやな総意に任せてしまうという傾向は続いているように思われます。この傾向と表裏一体をなしている、物事を深く考えないという特質は例えば戦後復興にも良く表れています。敗戦後の貧しさの中から何とか食べていくこと、生活を豊かにすること、国の経済力を強化していくことに丸くなって邁進してきたことは当たり前のことですが、しかし、一方で日本の戦後経済の復興は朝鮮戦争やベトナム戦争などの戦争特需に大きく助けられたことも周知の事実であり、その裏では多くのアジア人の生命が失われたことまでは深く考えず眼を瞑ってきました。生命に第一の価値を置くといっている我々医師でさえ眼を瞑ってきてしまいました。ノーム・チョムスキーには「アメリカ人は酷いことをする」というのは簡単だが日本人達が今しなければならぬのは鏡を覗いてみることで」と鋭い指摘をされてしまう始末です（ノーム・チョムスキー「メディアコントロール」）。

国力を上げること、経済を富ませることが生活を豊かにする上で必須であることは言うまでもありませんが、問題は経済至上主義が持つカネ・モノへの「過剰」なまでの執着であり、それと表裏一体の精神性の荒廃と大切な文化の喪失です。日本に古の昔から延々と続く、あらゆる自然に神を感じる土着の素朴な民族信仰と飛鳥時代に伝来した仏教との見事な融合（<sup>いにしえ</sup>神仏習合）による信仰心・精神性、そしてこれらと深く関わり合いながら磨かれてきた音楽、美術、工芸等の伝統文化が存在していました。ところが明治維新後に日本が成し遂げてきた経済と物質文明の発展と引き換えにこれらの価値を見失ってしまったという歴史があります。我々は歴史を何のために学ぶのでしょうか。時々立ち止まって来し方を振り返り、方向修正をし、文明が衰退しないように知恵を出すためではないのでしょうか。3.11を体験した今の日本はもう一度歴史を振り返るべきではないでしょうか。今、日本では2030年問題（高齢者が全人口の1/3に達する）が深刻な問題となっており、高齢者の増加と現役世代の減少により生産性低下、国力低下、財政破綻、社会保障制度と医療制度の崩壊、著しい格差社会の固定化が避けられないと言われています。今までと同様の経済的繁栄・経済至上主義を目指した行き方は再考を余儀

なくされていると言わざるを得ません。地球規模で考えても気候温暖化を始め生態系の大きな変動、生物種絶滅（IPCC, WWFの報告）、オゾン層破壊、森林伐採等自然破壊、異常気象などが続いており、地球再生が可能か否かのターニングポイントが近づいています。人類のみでなく多くの生物の生命の危機を本気で考える時期でしょう。

最初に記したように、医師・医学者が第一に尊重すべきは生命そして健康であり、であるならば、生命・健康に第一の価値観を置くものとして、特にリーダーを目指すものとして、生命を軽んじる状況、つまり戦争だけでなく、意識の外に追いやりやすく見逃しやすい社会状況にも、さらには日本の状況、そして地球環境にも重大な関心を抱き、常に注視批評していくべきでしょう。この散文は文明批評とも言うべき社会学の領域かもしれません。しかし私の意識の底に常に流れているのは、生命・健康を軽視し、ひいては人類という生物種の危機にも関わる現在の人間を取り巻く状況への医学・医療からの切なる思いです。Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be.

以上書き連ねてきたことは、最初に述べたように「血液内科学のリーダーを目指す若き血液内科医へのメッセージ」でもありますが、常日頃私が考えていることをこの「Be Ambitious!」の欄を借りて書かせていただいたという側面もあります。今までの「Be Ambitious!」とは全くと言っていいほど趣を異にしていますが、このような内容・スタイルにした一番の理由は、この「Be Ambitious!」という散文的読み物シリーズの意義に対する私の考えにも拠っています。このようなことを考えて何になるのか、社会が変わると思っているのか、と言われるかもしれませんが。しかしジャーナリズムが時の権力を監視するのが民主主義の根幹の一つであることは良識ある人達の常識であり、極めて重要であるのと同じく、様々な分野・領域におけるリーダー達が広い視野からこの社会の流れを見つめ、必要に応じ声を上げる役割も大変大きいと考えています。藤原新也が言うように、他人から見たら無意味としか思えないこと、やっても無駄に決まっているとされるようなことをするのはあなたが世界を変えるためではなく、世界によって自分を変えられないようにするため、ということでもあります（藤原新也「SWITCH 荒野の窓」）。そして「答え」を求め、スマホをつつき検索する主体にとって都合よく表示される「画面」を「正答」として疑問を抱かない現代人、そしてこのようなデジタルテクノロジーに囲まれた現代知の状況下で今考えるべき問題点を抽出し思考し続けることの身体性を取り戻すことでもあります。